

ホームページをご覧ください。 <http://www.katch.ne.jp/~kamiyaf18>

目次	
総会案内	1
植樹祭案内	1

美しい風景を子供 たちに	2
坂 田 成夫	

子どもたちの声	2
田中 常和	

今年の夢	2
------	---

大崎 かおり	
--------	--

森は生きている	3
杉本 勝	

尺アマガゴの棲む谷	3
斉藤 和彦	

昔の山に戻したい	3
三浦 進	

自然豊かな森づくり	4
江坂 慎也	

まちにも豊かなみどりを	4
杉浦 彦展	

海へ	草 5
荻 玲子	

大危機を救う	5
加藤 久巳	

日本のふるさとづくり	5
榊原 和久	

自然が豊かな心を育む	6
神谷 輝幸	

水道水への環境税	6
尾崎 八郎	

森を再生する文庫	6
小谷野 錦子	

秋の植樹祭のご案内

・「森は海の恋人」の著者

島山重篤氏が講演と植樹に気仙沼から来られます！！

・みんなで一緒に里山に苗木を植えましょう！！

こどもさんを連れて、ご家族でご参加ください。

・島山重篤氏講演

平成18年10月21日(土曜日)

豊川市野外センター(旧田峯小学校裏谷分校跡)

集合:15時30分、講演:16時~18時

・苗木を植える祭り

平成18年10月22日(日曜日)10時~15時 式典、植樹

会場:NPO森を再生する会「水源の森」

(北設楽郡設楽町田峯字西川)

会費:1000円(昼食付)

・森づくり討論会・懇親会

10月21日(土曜日) 18時~20時

会場:豊川市野外センター

会費:5000円(懇親会・宿泊費)

・申し込み:郵便局 口座番号0870-7-113816;加入者名森を再生する会

森を再生する会会報NO15巻頭言
2006年秋の植樹祭に寄せて

今年の夏は、少雨、多湿、高温で過ごしにくい日が続きました。連日の酷暑は地球温暖化を肌で実感する夏でもありました。私の家庭菜園にも異変が感じられました。雨が一向に降らず乾燥が続いたため、ゴボウ、ナス、ピーマンの生長も思わしくなく枯死寸前です。特にオクラが実をつけず、天候に大いに関係があるのではないかと推測されます。この分では、多分、小さな虫など生き物にも異変が起こっているはず。

そう言えば、今年の春先、段戸山で名古屋から来られた方と雑談していたときの言葉が思い出されます。

「今年は喋々が来ないねえ。いつも庭に植えてある梅の木から大きな梅が取れるのに今年は受粉しないから駄目かねえ。このところ地球がおかし

いよ。」と心配顔。

生態学者は口をそろえて警告しています。気候変動は動物や植物の生き物がやがて絶滅していく。すでにその序章は始まっている、と。

私たち森を再生する会は、生態学者宮脇 昭先生が提唱する「エコロジーの脚本」に従って土地本来の木(潜在自然植生)である「ふるさとの木」によるふるさとの森づくりを行っています。これまで5年間で、ブナ、ミズナラ、ホオノキなど15種類4000本を段戸山に植えてきました。人間の都合(好き嫌い、必要不必要)ではなく、自然に耳を傾け、自然の摂理に基づいた森づくりです。人間も自然生態系の一部であり、未来永劫に渡って生き続けることのできる本物の森を子孫に遺してゆきたいと思うからです。私たちの活動は小さな活動ですが、同じ思いの皆さんと手を取り合いながらこの輪が大きく広がっていくことを願っています。

春の植樹祭を終えて 神谷輝幸

厳しい冬を越えて、山は新緑に燃える5月4日、恒例となりました森を再生する会の春の植樹祭を「水源の森」で行いました。今年も170名の皆さんが参加、段戸の山も賑わいを見せました。

この日は、西三河地方を中心とした会員の家族をはじめ、森づくりに関心のある人が参加。アフガニスタンから安城学園高校に留学中のアフマディー・マリムさんの姿も見られました。参加した人たちは全員、森本来の植生に従って、ブナ、ミズナラ、ホオノキ、トチノキなど15種類、300本のポット苗を植えました。

植樹した後、いのしし鍋、段戸山の高原牛乳で昼食を取りながら、参加者の紹介があり、初めての人々との出会い・ふれあいも楽しいものでした。

実際、私のほかに数名の方は、自然農法の実践グループが紹介された川口由一さんの映画と講演会に参加し、新しい世界を知ることができました。



春の植樹祭はみんなでエコな行動を実践

榊原和久

さわやかな青空の下で、10年後そして100年後のために植樹をした。そして行動もエコ志向だった。齋藤さんのご好意の山の猪肉で恒例のしし鍋。もちろんシェフはちゃんこ鍋名人の森下さん。なんと前日から徹夜で150人分の下ごしらえをしてあった。沢山の野菜が切っており、さらにビックリ仰天、秘伝の鳥のつくねが大量に作ってあった。これの大鍋を数人が薪で炊き、そして隣で山の牧場直送の高原牛乳を竹内さん達が薪で温めて殺菌。両方食べ放題飲み放題。ヘルシーで美味しいちゃんこ薬が入っていない自然の甘みの牛乳、そして各自持参の弁当と、いい仲間、いい空気、山の緑がマッチして非常に幸せな時間だった。そしてゴミは持ち帰り。

食器洗いは15cm四方位に沢山用意したぼろきれで脂分と汚れを拭いてから、EM石けんとEM液で洗った。これは都築トヨさんから昨年の秋の時の脂分が大変だったから、いい石けんをと頼まれたので、浮かんだ方法です。これを家庭でやると本当に食器洗いで汚す量がほとんどなくなり、むしろ浄化源になる。私の家ではぼろきれとEM液で95%済。また、トイレが簡易型だったので、EM液を利用

した。ニオイ取りと分解促進。行き来は乗り合いとバス3台というなかなか合理的だった。日本人の自然と共に生きる心を伝えていきたい。



平成18年3月25日

山陰の緑の防人たち 斎藤 和彦

鳥取県の三朝温泉は清流三徳川の川辺にたたずむ静かな温泉地である。河鹿蛙の鳴く宿として全国的にも名の売れた温泉だが近年この上流にダムが建設され、水は汚れ、温泉街に働く女性たちは河鹿蛙を守ろうと立ち上がった。リーダーは木造三階建て旅館「木屋」の名物女将の御船道子氏である。

「河鹿蛙保存会の総会を開き、翌日みんなで水源の三徳山に登って森づくりを行います。」6年前の5月のことだった。女将さんからこんな誘いを受けて参加した。旅館の女将さんや仲居さんや盲のあんまさんたちが集まった。河鹿蛙保存会は楽しく開催され、翌日曜日はみんなで、三徳山の国有林に登って千本の広葉樹の苗木を植林することになった。御船さんのお話では「今年で三年目ですが、今回も手作りの案内状をメンバーたちが手分けして発送しました。何名の参加があるか解りませんが、苗木と会場と百名分のお握りだけは用意しました。」とのことだった。

翌日、会場は晴れ渡り、出迎えてくれた国有林の担当者が「広葉樹の苗木の植樹は許可が出にくいので、あらかじめ今年の春の桜の植樹の際、植える間隔を広くしておきましたので、その間に植えてください。」と説明された。駆けつけた鳥取県

漁連の会長が「海を守らなければならない私たちが恥ずかしい限りです。」とあって漁協青年部を引き連れて参加され、会場で大漁旗を張り巡らせていた。軽トラックに孫を乗せて飛び入り参加した地元の町長も「公務もあつたが、地元の一人としてこの企画を見過ごすことは出来ませんでした。」と挨拶された。小さな地元の小学校からも先生や子供たちの参加があつた。

やがて県森連の車があらかじめ注文しておいた苗木を積んで数名で登ってきた。丁度セレモニーの最中だったので「突然ですが一言ご挨拶を」と司会者がマイクを向けるとハンドルを握ってきたその人は「実は私は県森連の理事をしておりますが、失礼ですが素人の人たちがどんなことをされるのか興味があつて配達を買って出ました。今日この目で見て、自分たちが恥ずかしくなりました。どうか今回の苗木は全部私に寄付させてください。」と申し出られた。参加者から参加費は徴収せず、昼食やバス代、苗木代を会員のカンパでまかなおうとしていた女性たちから歓声の声が上がつた。

陽は輝き、薫風がここちよく人々の頬をなぞた。小高い会場から見下ろした風景は起伏の多い丘が続き、遙か遠くに牧場やゴルフ場の緑が眺められた。私は野鳥の声にさえ胸が熱くなつた。



と

三河湾浄化市民塾から

ー地球温暖化防止にも役立つ私たちの活動

森を再生する会理事 加藤久巳

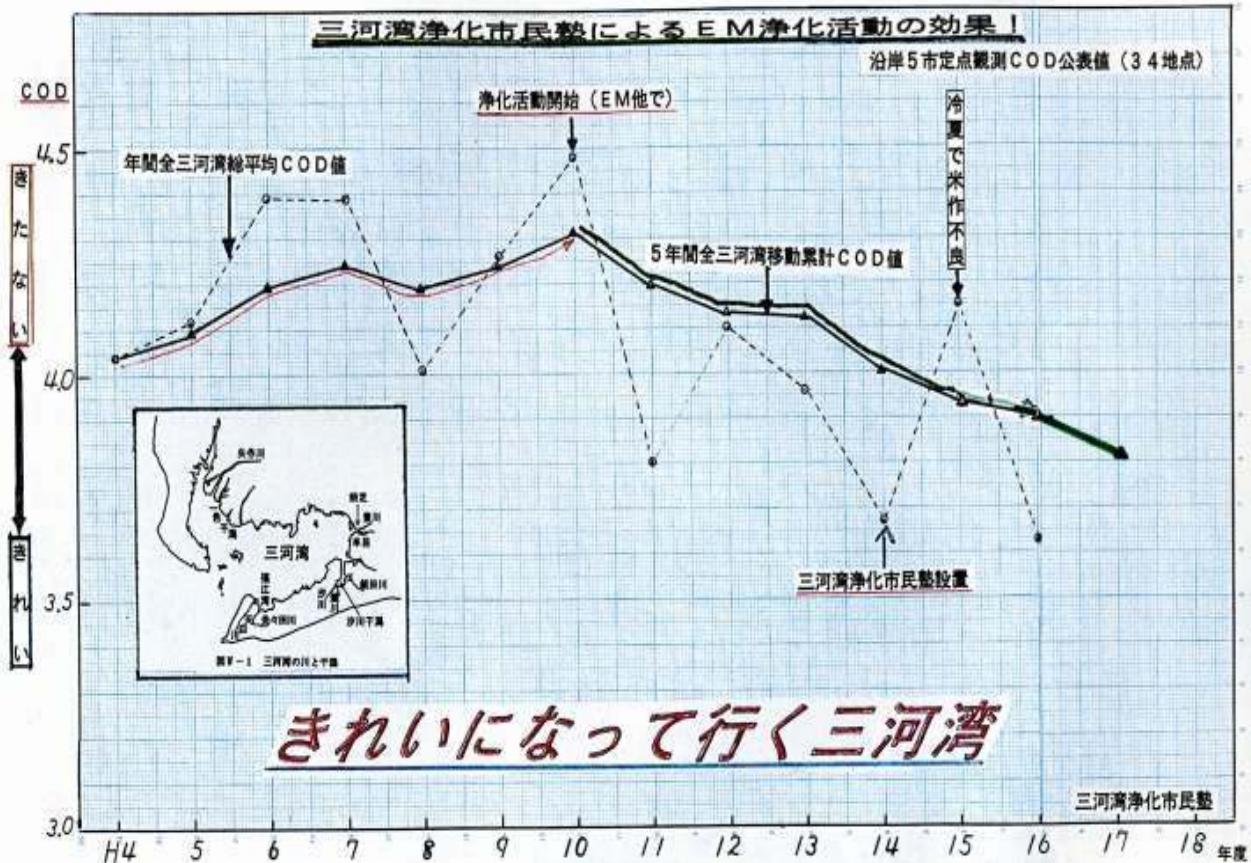
三河湾浄化市民塾は、国立公園のうちで日本一汚れているといわれていた三河湾の海水を浄化しようと立ち上がったボランティア団体です。今では2000人の塾生が大活動をしています。活動の主体は、豊川や矢作川の主流・支流を含めて、三河湾水系の上流から河口に至る多数の町や村で、EM（有用微生物群）の力を借りてヘドロをスピーディーに消滅させるというものです。私たちの平成10年から7年間に続けた活動の結果、内陸の溝、川や湾内にあったヘドロがどんどん減りました。ちなみに、矢作川・平坂入江のヘドロが消えましたし、水がきれいになって、3年前から湾内で育った天然鮎が川を大挙して遡上する様子が見られるようになりました。三河湾の水質がきれいになって行く様子を、COD（化学的酸素要求量）の変化で表しましたので、図1「きれいになって行く三河湾」をご覧ください。

現在の最大の環境問題は、地球温暖化であることは、ご存知のことと思います。温暖化の最大の原因物質といわれているのは、二酸化炭素（炭酸ガス）ですが、私たちが減らそうとしているヘドロからは、メタンガスが大量に発生します。このメタンガスは、温暖化を進めるガスです。その温室効果は二酸化炭素（炭酸ガス）の21倍もあります。ですから、市民塾がやっている活動は、地球温暖化防止活動の一つであるご理解下さい。

最近の温暖化関係の報道を以下に挙げます。この地球温暖

化が、日本列島でも予想以上に急速に進んでいることが分かります。

昔は長崎以南にいたナガサキアゲハ蝶が、北上し続け、今では、神奈川県に到達している。東京都の平均気温が4度上昇し、昔の熊本の平均気温になってしまった。1回あたりの集中豪雨降雨量が、確実に20%以上増えている。24時間降雨量が200ミリを越える日数が、50%増えている。水温上昇で琵琶湖の溶存酸素が、ドンドン減少し、魚類、生物に悪影響を与えている。



平成18年3月25日

植樹の場所づくり ―まずはスギ・ヒノキの伐採から

小谷野 錦子

9月26日日曜日、秋の植樹祭の準備に参加しました。大崎かおりさんの車に便乗して今回の植樹会場につきました。実は参加とは名ばかりで、私には身体に不自由なところがあるので、何ほどのことも出来なかったのですが、見て来ました皆さんの素晴らしい働きぶりをお伝えしたいと思います。

会場は前回の場所から、小川に沿って2分ほど上流に歩いた、西側の山の北側の斜面でした。周りの斜面にはびっしりとスギやヒノキが生い茂り暗い林でした。これらの木は樹齢30年くらいということです。仲間たちはすでに仕事を始めていました。

作業をしている斜面はすでに中腹まで、ヒノキとスギが切り倒され日が差し込んで明るくなっていました。伐採された木は葉と枝をつけたまま、梢を下にして倒れ、今にも滑り落ちそうです。見ていると時々、「倒れるから逃げて」と大きな声が聞こえます。木の伐採には、まず、木を倒す方向の幹の面にチェーンソーで幹をくさび形に切り取ってから、反対側に切り込みを入れ、木を押して倒します。木は静かに斜面下へと倒れます。伐採された木は片付けなければなりません。枝を切り払ってから、二、三人で上手に誘導して木を滑らして、下に下ろします。

最後は木をワイヤーでユンボの先に結びつけてから吊り上げて、向きを変え平地に降ろします。榊原さんが綱を引っ張り誘導し、斎藤さんがユンボを運転しました。篠田さんが運ばれた木の枝をチェーンソーで切り落としました。切り落とされた枝は緑の葉を付けたまま、焚き火にくべました。スギやヒノキの枝は大きな炎となって激しく燃えました。

出来上がった丸太は4メートルくらいの長さに切りそろえられ、井桁の形に積み重ねられます。後日、皮を剥かれて建築材

として使われるそうです。（「森を再生する会」の会員のための建てものを作るとか・・・）

切り開いた斜面の上の方では、切り株に丸太を渡して足場を作っている神谷さんが小さく見えます。急斜面ですから、植樹のときに人が安全に歩けるように、階段状に横に長い足場を取り付けているのです。準備は植樹祭の前まで、毎週日曜日続けるそうです。本当にお疲れ様。お陰さまで、素晴らしい植樹祭が出来ることでしょう。楽しみです。

働く皆さんとご一緒に、私にも元気が戻ってくるのを感じました。夢の広がる夏の日でした。



環境キーワード 解説

1. 地球温暖化

平成18年度年会費納入のお願い

本年度年会費を下記の金額の通り、同封いたしました振込用紙にてご入金いただきますようお願いいたします。なお、平成18年度総会(4月22日開催)時には、現金での納入を受け付けいたします。お手数をおかけいたしますがよろしくお願いいたします。

年会費 2,000円

理事長 神谷 輝幸

: 郵便局 口座番号0870-7-113816; 加入者名森を再生する会

編集から 森を再生する文庫

小谷野 錦子

のご感想、ご意見、夢の続きををお寄せ下さい。お待ちしております。E-Mail: kinko@luck.ocn.ne.jp、
Tel&Fax: 043-275-0877 編集委員会

植樹の場所づくり ーまずはスギ・ヒノキの伐採から

小谷野 錦子

9月26日日曜日、秋の植樹祭の準備に参加しました。大崎かおりさんの車に便乗して今回の植樹会場につきました。実は参加とは名ばかりで、私には身体に不自由なところがあるので、何ほどのことも出来なかったのですが、見て来ました皆さんの素晴らしい働きぶりをお伝えしたいと思います。

会場は前回の場所から、小川に沿って2分ほど上流に歩いた、西側の山の北側の斜面でした。周りの斜面にはびっしりとスギやヒノキが生い茂り暗い林でした。これらの木は樹齢30年くらいということです。仲間たちはすでに仕事を始めていました。

作業をしている斜面はすでに中腹まで、ヒノキとスギが切り倒され日が差し込んで明るくなっていました。伐採された木は葉と枝をつけたまま、梢を下にして倒れ、今にも滑り落ちそうです。見ていると時々、「倒れるから逃げて」と大きな声が聞こえます。木の伐採には、まず、木を倒す方向の幹の面にチェーンソーで幹をくさび形に切り取ってから、反対側に切り込みを入れ、木を押して倒します。木は静かに斜面下へと倒れます。伐採された木は片付けなければなりません。枝を切り払ってから、二、三人で上手に誘導して木を滑らして、下に下ろします。最後は木をワイヤーでユンボの先に結びつけてから吊り上げて、向きを変え平地に降ろします。榊原さんが綱を引っ張り誘導し、斎藤さんがユンボを運転しました。篠田さんが運ばれた木の枝をチェーンソーで切り落としました。切り落とされた枝は緑の葉を付けたままで、焚き火にくべました。スギやヒノキの枝は大きな炎となって激しく燃えました。

出来上がった丸太は4メートルくらいの長さに切りそろえられ、井桁の形に積み重ねられます。後日、皮を剥かれて建築材として使われるそうです。（「森を再生する会」の会員のための建てものを作るとか・・・）

切り開いた斜面の上の方では、切り株に丸太を渡して足場を作っている神谷さんが小さく見えます。急斜面ですから、植樹のときに人が安全に歩けるように、階段状に横に長い足場を取り付けているのです。準備は植樹祭の前まで、毎週日曜日続けるそうです。本当にお疲れ様。お陰さまで、素晴らしい植樹祭が出来ることでしょう。楽しみです。

働く皆さんとご一緒に、私にも元気が戻ってくるのを感じました。夢の広がる夏の日でした。

上の大危機を防ぐために、「森を再生する会」が率先的に、危機から脱出する活動をなすことができれば、これは大変価値のある余生となると思う。(案はいろいろ考えられる。)

そのための方法を早く決断し、どしどし実行したいと思う今日この頃である。

こんな重要なことを決して夢で終わらせてはいけないのだ。これをなすのが「森を再生する会」ではないだろうか。

秋の植樹祭には、気仙沼でカキを養殖しておられる畠山重篤氏をお迎えし、講演をしてもらいます。畠山重篤さんは、海と森が密接な関係にあることを実証的に研究し、漁民が上流の山に広葉樹を植える活動を進めている方です。その活動のようすは、著書「森は海の恋人」に詳しく書かれています。新しい出会いもまた植樹祭の楽しみです。

それでは、10月21日、22日、秋の段戸山で、また、お会いしましょう！

